

令和 4 年度若手研究員農家等実地研修

農地基盤情報研究領域 農地整備グループ 久保田 幸

農研機構では、若手研究者を研究成果の将来の普及現場である農業経営体等へ派遣し、農作業実務経験と、経営者との対話を通して、社会に役立つ研究開発・技術開発を行う意識を高める機会を図ることを目的とし、農家等実地研修を行っています。

私は、鹿児島県曾於市大崎町にてダイコン、葉ネギを主要品目として栽培、出荷を行っている有限会社大崎農園様にて、5日間の農家実地研修を行いました。実地研修では、ダイコンとネギの収穫と選果、また、工場での切干大根の加工作業を行いました。

ダイコンの収穫作業は機械化が進んでおり、作業効率が良く、収穫機 2 台で広い圃場のダイコンを数時間で回収できます。植え付けを工夫し、旋回用の枕地が確保されているなど農地の利用形態も機械に合わせて調整されていました。私は収穫機の荷台に乗り、葉の切り落とされたダイコンを鉄コンテナに詰めていく作業を行いました。手作業での収穫も行ったのですが、鉄コンテナの移動は容易ではなく非常に手間がかかり、収穫機によってかなり省力化されていると実感しました。

ネギの収穫は全て手作業でした。収穫時に土を払い落とすために細かく根をほぐすなどの作業は、葉が折れやすく想定よりも繊細な作業でした。また、根をほぐしておくことで後の洗浄作業で土が残りにくくなり、手間が省けるなど各工程を実際に体験することで理解できることが多くありました。選果作業も、傷の有無やネギの長さ等の多様な基準で選別するため、想定していたよりも複雑な作業でした。いずれの作業も慣れない私がやると時間がかかり、ネギも元気がないような印象になってしまうのですが、従業員の方はすばやくとて



写真：ダイコンの圃場（右）と葉ネギの収穫の様子（左）

も正確で、収穫したネギもハリがあり美味しそうでした。従業員の方々が複雑な作業を短時間でこなす様子はとても印象深かったです。

ダイコンの収穫機には一台につき 5 人の人員が必要であることや、ネギの収穫は折れや曲がり避け、傷つけないように引き抜く必要があること等を実感し、野菜の収穫作業の機械化はコメやダイズを対象とした機械化とは全く異なる技術を必要としていることを感じました。野菜では、細々した作業の一部でも機械化することで現場の省力化に貢献できるのではないかと感じました。

鹿児島県では今年の 11 月は暖かい日が続き、ダイコンの生育が前倒し気味に進んだそうです。そのため、収穫適期であっても出荷先がないため収穫できず、規格外まで大きくなってしまふなど、長期保存ができない野菜だからこその生産の難しさが伺えました。環境情報をいかに生産現場で活用するか、また流通までのフォローを生産側からどうすればできるのか、について考える必要があると感じました。

5 日という短い期間でしたが、様々な現場を実際に体験したことで理解できた感覚や課題点が多く、非常に貴重な研修となりました。有限会社大崎農園様は漁業から農業へ新規参入し、現在では大規模に野菜を生産し、さらには 6 次産業化まで実現しています。多角的に経験を積んできた方々だからこその視点や展望など意義深い話を拝領することができ、今後の研究活動に向けた良い刺激を受けました。

最後になりましたが、研修を受け入れていただいた有限会社大崎農園様に深く感謝申し上げます。